

## 眼領域での薬学研究Update

オーガナイザー  
北谷和之(摂南大薬)  
森麻美(帝京大薬)

ヒトは外界からの情報の8割以上を視覚から取得しているため、視機能の低下はQuality of Life (QOL) の著しい低下につながる。眼科領域では、この眼の見え方に重点を置いたQuality of Vision (QOV) という概念が一般的である。ただ見えるだけでなく、快適に見えること、すなわちQOVを低下させないことが、QOLの維持に非常に重要である。

脂質は、生体に必須の栄養素で、細胞膜の基本構成要素であると共に、細胞内外の情報伝達においてメディエーターとしても働くなど、様々な役割を果たしているが、近年では眼疾患への関与も明らかになってきている。

そこで本シンポジウムでは、QOVを低下させる代表的な疾患であるドライアイ、網膜色素変性、緑内障および白内障の病態解明と新規治療薬の創出および脂質サプリメントによる予防医学に関する最新の知見を紹介し、今後の課題や展望について議論したい。

(森麻美)

バイオメディカル研究を加速する  
生体分子分析技術の最先端

ー分析系若手シンポジウム2024

オーガナイザー  
杉山栄二(静岡県大薬)  
前川正充(東北大病院薬)  
岩崎雄介(星薬大)

近年、生体試料中成分の新しい分析法を応用する試みが急速に進んでいる。新たな分析法を迅速かつ的確に導入することが重要である一方、依然として解析困難な事象を明らかにするためには、さらなる技術開発が必要である。数ある課題の内、自ら取り組むべき事項とその解決策を見出すためには、関連する多様な分析法を横断的に捉える視座が重要と考えられる。また、

そのような視座の養成において、他の分析法における技術的課題や最新の開発状況を知ることが有効であると考えられる。

そこで本シンポジウムでは、異なる分野の手法開発を担う新進気鋭の若手研究者を招き、今後のバイオメディカル研究を加速する各種分析法(機能性マイクロ粒子による分子センシング、蛋白質中の異性化アミノ酸解析、質量分析イメージング、空間レギュロミクス、プロテオミクス、マルチオミクス)の最新技術を俯瞰することで、多様な薬学研究の進展を幅広く促すことを目的とする。

(杉山栄二)

生物系薬学部会・微生物シンポジウム

マイクロバイームから紐解く  
新しい病態の理解と新規治療戦略

オーガナイザー  
河村好章(愛知学院大薬)  
杉田隆(明治薬大)

ヒトには100兆を超える微生物がマイクロバイームとして存在している。このマイクロバイームは、ヒトの体に共生する微生物(細菌・真菌・ウイルスなど)の集合体で、これら微生物は相互に影響し合いながらバランスを保持している。マイクロバイームは、自身の菌体成分や代謝産物を介して宿主であるヒトの免疫系、代謝系、神経系、さらには脳にまで影響を与えるため、このバランスが破綻すると、疾患に進展することがある。従って、

マイクロバイームの制御はヒトの健康増進と疾病克服にとって重要な要素となる。

本シンポジウムでは、腸管や皮膚などのマイクロバイームに焦点を当て、マイクロバイーム解析から紐解かれた病態への関与と新たな治療戦略として注目されている宿主特異性の高いファージを用いた治療法についても紹介する。参加者がヒトのマイクロバイームと健康や疾患との関わりについて最新の理解を深め、次世代の臨床応用を考究することにつながる先駆的な議論に展開できることを期待している。

(河村好章・杉田隆)

第8回病院薬剤師が実践するリバー  
トランスレーショナルリサーチの最前線

ー今、必要とされている創薬・育薬のアプローチ

オーガナイザー  
増田智先(姫路獨協大薬)  
伊東弘樹(大分大病院薬)  
池田龍二(宮崎大病院薬)  
城野博史(熊本大病院薬)

近年の目覚ましい科学技術の進歩に伴い、疾患の原因・病態の理解に遺伝子レベルを含む様々な解析がなされ、分子標的薬など多様な創薬モダリティを活用した新たなクラスの医薬品が革新的な治療成績を生み出しつつある。一方、日常臨床においては、臨床開発段階で集積されたエビデンスだけでは解決できない症例も多く、臨床経験を

有する薬剤師自らが試行錯誤を繰り返しながら新たなエビデンスを創出することが、個々の患者に最適化された薬物治療の実現に求められる。

本シンポジウムでは、臨床と基礎の双方に精通し、新たなエビデンス創出の中心的な役割を担う薬剤師が実践する創薬・育薬研究に焦点を当てる。臨床薬剤師ならではの着眼点、臨床への還元を目指した薬学研究の意義と重要性について紹介いただき、病院薬剤師が取り組むことが望ましい研究の現状、問題点、今後の展開について考えたい。

(城野博史)

女性研究者が拓く肝臓を中心とした  
疾患研究と創薬への展開

オーガナイザー  
植山(鳥羽)由希子(阪大院薬)  
清水かほり(大阪大谷大薬)

肝臓は、糖や脂質などの様々な物質の代謝や合成を担い、生命の恒常性維持に必須の臓器である。肝臓に障害が起きると肝炎を発症し、長期化した場合は肝硬変、肝癌へと進行する。これらの肝疾患は、肝炎ウイルスの感染や飲酒、遺伝子変異、薬剤性肝障害などが原因で発症することに加え、近年では食習慣の変化による脂肪性肝疾患の罹患率も増加傾向にある。さらに、肝機能の低下は全身状態へ影響を及ぼすことから、肝臓と他臓器との関連も注

目されてきた。しかし、肝疾患の発症や進行の機序には不明な点が多く、病態が進行した場合の治療法には限りがある。これらの理由から、肝疾患の発症・進展の解明や、研究基盤技術の開発、他臓器との関連の解析などが盛んに行われ、新たな治療法や治療薬の確立が試みられてきた。

本シンポジウムでは、肝臓学分野において、それぞれの視点から研究に取り組む女性研究者にご発表いただき、肝臓を中心とした疾患研究と創薬への展開について議論したい。

(植山(鳥羽)由希子)

## 創薬を指向した自己集合研究の最前線

オーガナイザー  
森貴裕(東大院薬)

自己集合は低分子化合物からポリマーなどの高分子、蛋白質などの生体高分子に至るまで自然界に一般的に見出されている現象である。巨大構造体を形成する際に用いられる手法であり、ウイルスの外骨格や微生物のコンパートメントシステムなど多くの例が存在する。このような相互作用は代謝反応の効率化、酵素活性の発現、核酸の取り込み輸送、ドラッグデリバリーなど様々な生命現象に重要であり、その相互作用解析、応用研究は世界的に

注目されている研究分野である。

本シンポジウムでは、計算化学による相互作用予測から、立体構造解析による相互作用解析の研究、人工的に構築した機能性自己集合蛋白質や自己集合有機分子を利用した創薬化学研究まで、幅広い領域における自己集合分子の研究例を紹介する。本領域の研究に取り組んでいる化学、分子生物学、構造生物学といった異分野の最前線にいる若手研究者が集い、最先端研究成果を発表することで、蛋白質、有機化合物の自己集合研究の展望について議論を深めたい。

(森貴裕)

## 薬学会@横浜、サロン開設のお知らせ

## Salon de 京都廣川書店

パシフィコ横浜・会議センター 2F

従来の書籍展示に留まらず、新規の取組等の様々な内容の御紹介を予定しております。おくつろぎ頂けるようにコーヒーも用意しておりますので、是非、お立ち寄り下さい。

京都廣川書店

京都廣川リサーチ&コンサルティング

医療統計推進協会

京都廣川書店  
KYOTO HIROKAWA

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-6-12  
TEL: 03-5283-2045 FAX: 03-5283-2046

URL: <https://www.kyoto-hirokawa.co.jp/>